

## クルグズスタン文書館作業記

秋 山 徹

### はじめに

「暴動になるかもしれない」——文書館の係員が緊張した面持ちで言った。秋深まる2005年10月下旬、クルグズスタンは首都ビシュケクの中心部、国立中央政治文書館の薄暗い読書室にも群衆のうなり声が響いてきた。周知の通り、クルグズスタンの政治情勢は混迷を極めていいる。昨年3月に前大統領が「ノック」アウトされて以降、現政権も「バキバキ」と軋みをたてている。昨年9月から10月にかけては政治抗争に絡んで最高議会代議員が二名も殺害され、刑務所では囚人の暴動が発生した。殺害された議員の支持者たちが文書館に隣接する最高議会前で連日デモを開いていた。

筆者は平和中島財団より奨学生として採用され、2005年4月から二年間カザフスタン共和国アルマトゥ市を基地として中央アジア諸国ならびにロシアで研究に従事する機会を得た。ロシア帝政期からソ連時代初期にかけてのクルグズ社会の動態を「マナブ」と呼ばれた遊牧貴族層を軸として、その生成、発達、変容そして消滅の過程を明らかにすることを研究の主眼としている。本文では昨年9月から12月にかけてクルグズスタンで行った研究作業体験に基づきながら、文書館事情を述べてゆきたい。

### 1. 近現代クルグズ史を巡る史料の分布状況

まず近現代クルグズ史に関する史料の分布状況について概観してみよう。同時期のクルグズの動向を示す史料は中央アジア諸国に分散している。これは現在のクルグズスタンの領域が帝政期には北部はセミレチエ州とスィル・ダリヤ州、南部はフェルガナ州にまたがっていたことに起因する。このため帝政期の史料の大半はカザフスタン国立中央文書館の「セミレチエ州庁」や「ステップ総督府」、またウズベキスタン国立中央文書館の「トルキスタン総督府」、「スィル・ダリヤ州庁」、「フェルガナ州庁」の各フォンドに存在する<sup>(1)</sup>。これに加えてツァーリ政府中央の意向を知るにはモスクワの「ロシア国立歴史文書館」の精査が必須と

<sup>(1)</sup> 両文書館の事情については『日本中央アジア学会報』第1号（2005年3月）の野田仁、浅村卓生両氏の文章を参照されたい。

なる。さらに中国側にも史料が存在する可能性が高いことはいうまでもない。

クルグズスタンに保存されているのは主に革命期からソ連時代初期以降の文書である。しかし1926年にクルグズ自治社会主義共和国が成立するまで、行政の比重がタシケントとアルマトゥにあったため、同時期の文書もやはり各地に分散している。特にカザフスタンの「アルマトゥ州国立文書館」や「カザフスタン大統領文書館」での調査が必要であることをまず述べておきたい<sup>(2)</sup>。では以下、文書館の利用事情を皮切りに、その概要を紹介してゆこう。

## 2. アルヒーフの利用事情

ビシュケク市内中心部、アラトゥ広場の真南を東西に走るトクトグル通り105番地に関する石造りの建物がある。この建物の一階には文書館事業の中央統括部および国立映画音響写真資料館、三階には国立中央文書館がある。文書館の利用には紹介状が必要である。現地研究機関発行のものである必要はない。また研究テーマを簡潔にまとめた研究計画書などを持ってゆくとよい。しかし注意すべきことは、詳細なテーマを文書館側に申ししないこと、また詳細な文書番号を研究計画書に記載しないことである。文書の主題と研究テーマとが合致しない場合、閲覧を許可されないことがある。確かに短期決戦で臨む場合、請求する文書は研究テーマに即応した文書が中心となるので差し支えはない。しかしある程度時間的余裕がある場合、新たな研究テーマを見つけるという意味においても幅広い文書に目を通すことが必要であるし、幅広く調査したいというのは研究者の性であろう。一日の勤務時間の多くをチャイと同僚との雑談によって過ごし、機嫌が良ければコーヒーの一杯もサービスしてくれる気さくな文書館係員ではあるが、こういうところは意外とチェックが厳しいので注意が必要である。ちなみに筆者は研究の核心である「マナプ」の「マ」の字も出さず、「中央アジア遊牧民社会史 —19世紀から20世紀」といった具合に申告した。文書一件の請求につき現地人、外国人を問わず10ソム（約25円）がかかる。

クルグズスタンの文書館はノートパソコンを持ち込んでの作業が可能である。ただし停電することも稀ではないため、長時間持続可能なバッテリーを携帯しておくのが得策である。また最大の利点はデジタルカメラやスキャナで自由に文書を撮影させてくれることである。これによって作業を能率的に遂行することが可能である。外国人の場合、写真一枚につき原則として50ソム（約125円）を支払う。基本的に月末に撮影文書一覧表を作成して自己申告する。ただし、かなりの枚数を撮影する場合、割引交渉に応じてくれる場合もある。しか

<sup>(2)</sup> 現代のカザフ人にとって、カザフスタンでクルグズに関する史料収集をすることは「奇怪」、そして時には「不快」にさえ映るようである。カザフスタン国立中央文書館の文書カタログにおいて、クルグズ人は「カザフ人」と表記されることもしばしばである。

し、効率を追求するのであればパソコン等の利用は極めて有効ではあるが、もちろん「欠点」もあるように思う。パソコンで文章を入力した場合、ノートにペンで手書きした場合に比較して史料の身に付きかたが弱い気がしてならない。やはり手書きの場合、史料を「体で覚える」といった側面が強いのかもしれない。

史料の言語はソ連時代初期に限っていえば、多くがタイプライターで書かれたロシア語である。もちろんアラビア文字、ラテン文字表記のクルグズ語史料も少なからず存在する。特に地方レベルの文書になるとクルグズ語で書かれている割合は大きくなる。しかも鉛筆やペンで「書きなぐられている」といった印象を禁じ得ないものが多く、その場での読解が困難な場合が多い。こういった場合、スキャナやデジタルカメラの使用は大きな意義がある。

### 3. クルグズスタン国立中央文書館<sup>③</sup>

「民族の精神と哲学はアルヒーフに具現化される」—国立中央文書館の読書室入口にはこのような張り紙がある。同文書館にはロシア帝政期からソ連時代、現代に至るまでの行政文書を中心に2383フォンド、50万8950点の文書が保存されている。ロシア帝政期の文書は「ピシュペク（トクマク）郡庁」、「プルジェヴァリスク郡庁」、「アウリエ・アタ郡庁」を初めとして存在するが、その絶対数は147フォンドに6657点と少ない。また「キルギジアのロシア帝国への併合に関する文書のコレクション」と銘打ったフォンドが存在するが、これはソ連時代に地元の研究者がモスクワの文書館で収集した史料をタイプ打ちして製本したものである。圧倒的多数を占めるのは、50万2293点を数えるソ連時代の文書群である。筆者が主に閲覧したのは「カラ・キルギス自治州革命委員会（1924-27年）」（フォンド20）、「クルグズ・ソヴィエト社会主義自治共和国中央執行委員会（1927-37年）」（フォンド21）であったが、ここには土地水利改革、コレニザーツィア政策、バイ・マナプの強制移住、バスマチ運動、共和国境界面定、夏営地ソヴェトの開設など多岐にわたる興味深い話題が含まれている。また、共和国中央レベルだけでなく末端の郷や農村ソヴェトのフォンドも数多くある。しかし近年その多くが地方文書館に移されてしまったことを付言しておこう。また行政文書だけでなく、革命期から現在に至るまでの新聞が保存されている。

しかし、残念なことは非公開秘密文書が多いことである。しかもそれは現在非公開とする積極的理由があるとは到底思われないものばかりである。所長が目を通した上で許可すれば閲覧させてくれるようだが、この辺は閲覧室の係員のその日の機嫌に左右されてしまっているのが現状である。カザフスタンなどでは秘密文書の公開が進んでいる模様だが、まさにソ

<sup>③</sup> 所在地・連絡先は以下の通り。г. Бишкек, ул. Токтогула 105. тел. +996 (312) 621365; +996 (312) 621365. (尚、電話番号などは筆者が利用した当時のものであり、変更される可能性も高いので予め御了承されたい)

連時代の規則をそのまま惰性で引き摺っているといても過言ではない。これには現地の研究者も辟易している様子であった。このような体制で「民族の精神」など明らかになるのだろうか？状況の改善を願ってやまない。

#### 4. クルグズスタン国立中央政治文書館（旧共産党アルヒーフ）<sup>(4)</sup>

ソヴェト連邦の各共和国における最高の意思決定機関は中央執行委員会であったが、同時に共産党が大きな役割を担っていたことは言うまでもない。共産党関係の文書が保存されているのが国立中央政治文書館である。ソ連時代には「クルグズ共産党中央委員会付属歴史研究所党アルヒーフ」と呼ばれたこの文書館はフルンゼ通り457番地、最高議会の斜向かいにある。1917年から1999年にかけての文書56万7999点が2915フォンドに保存されている。日本人としては地田徹朗氏が同文書館の開拓者であり、氏が既に各所で紹介されている<sup>(5)</sup>。大変利用しやすい文書館である。端的にいて所長以下、職員に「やる気」があり、利用者の研究テーマにも理解を示してくれる。また、最近は所蔵文書カタログのデジタル化作業も進展している模様である。数年後には更に便利な研究環境が整っていることであろう。ただし、この作業過程で文書の「統廃合」がなされ、文書が全く別のフォンドに移されてしまった場合もある。このため研究書や論文の脚注から拾ってきた文書番号がすでにカタログに存在しない場合もある。

筆者が主に利用したのは「全ソ連邦共産党（ポリシェヴィキ）キルギス州委員会（1924-37年）」（フォンド10:9584）である。これは国立中央文書館の中央執行委員会フォンドに対応するものである。基本的に文書は党執行部会議の「議事録（протокол）」と「資料（материал）」の二つの部分から構成されている。「議事録」には議題の「聴聞（слушали）」とそれに対する「決定（постановление）」が極めて簡潔に書かれている。重要なのは「資料」である。これはいわば会議の参考資料であり、議事の細かい具体的情報はここから得られる。研究者にとってまさに垂涎的である。そこには党地方委員会からの報告書や書簡、訴願、ときに密告などが収められている。ただ、全ての議事録に資料が添付されているとは限らない。また1960年代、70年代以降の文書になると閲覧が許可されるのは「議事録」に限られ、肝心の「資料」は閲覧できないようである。またこれらを補完するものとして地方党委員会、更に下位レベルの郷党委員会のフォンドが保管されているので活用する必要があるだろう。

1920年代、カラコルやナルン、スウ・サムル、タラスといった山岳地方にソヴェト政権が

<sup>(4)</sup> г. Бишкек ул. Фрунзе 457, тел.: +996 (312) 622104 / 622008.

<sup>(5)</sup> 地田徹朗 「ソ連時代の遺産と自立との狭間で—クルグズ共和国中央国家政治文書館」『アジア研ワールド・トレンド』2005年3月号（No.114）を参照されたい。

浸透してゆく際に、詳細な社会構造調査が実施された。これは1920年代に全連邦レベルで盛んに実施されていた「地方誌研究」や初期ソ連民族学の流れとも密接に関係しているが、その報告書も「資料」のなかに保管されている。中には一メートル四方の大型紙に細かな字で書き取られた部族の系譜（サンジラ）などもある。「私たちはキルギス社会を知らない」一報告書の冒頭はそのように始まる。もちろんイデオロギー的制約はあるものの、無知を認め、理解しようとする強烈なバイタリティは、現代の研究者にも新鮮な刺激を与えてくれる。

## 5. ナルン州国立文書館<sup>(6)</sup>

以上、国家中央のレベルの文書館を紹介したが、クルグズスタンにはウスク・キョル、チュイ、ナルン、タラス、ジャララバード、オシュ、バトケン各州に地方文書館が存在する。これらの文書館の活動状況はビシケクのアルヒーフ統括部<sup>(7)</sup>に問い合わせれば親切に教えてくれる。本文では昨年11月初旬に筆者が訪れたナルン州国立文書館について触れてみたい。

ナルンは天山山脈のほぼ中央部に位置する小さな街である。この時期すでに昼間でも吐く息は白い。メインストリートのレーニン通りとクルムバエフ通りの交差点付近に文書館はある。読書室に暖房はなく、真冬用ダウンコートを着たままでの作業となった。ここには革命期から現代に至るまでのナルン州の行政文書が保管されている。郷ソヴェト、コルホーズ単位でもフォンドが設けられている。コルホーズの設立過程などを調べるうえで興味深い史料を獲得できるだろう。また今回筆者が主に閲覧した「ナルン州ソヴェト執行委員会」フォンドは元来ビシケクの国立中央文書館に保管されていたが、数年前ナルンに移管されたものである。これが前政権による地方への配慮の一施策であったか否か判断はしかねるが、少なくとも移管された文書を最初に見たのは筆者であった。移管されたまま開封されず埃を被った梱包用紙に包まれた文書の束がドサッと置かれ、筆者の目の前で開封されていった。総じて文書管理はかなり杜撰で保存状態も極めて悪いことが懸念される。紛失してしまった文書が少なからず存在したのは非常に残念であった。また、文書館員においては文書への価値意識が希薄なのであろう、写真も無料撮り放題であった。

## 6. 科学アカデミーマナス研究所手稿部<sup>(8)</sup> / 国立映画音響写真資料館<sup>(9)</sup>

クルグズ科学アカデミーマナス研究所（旧言語研究所）手稿部は歴史・民族学関係の貴重な史料が保存されていて研究者必見である。中心は帝政期からソ連時代にいたる知識人や学

<sup>(6)</sup> г. Нарын ул. Кулумбаева 27. тел: +996 (3522) 22589.

<sup>(7)</sup> г. Бишкек. ул. Токтогула 105. тел: +996 (312) 663368.

<sup>(8)</sup> г. Бишкек. ул. Чуй 265 а. тел: +996 (312) 243468. (マナス研究所)

<sup>(9)</sup> г. Бишкек. ул. Токтогула 105.

者の草稿、覚書、また彼らが論文を執筆するために方々の文書館で収集した史料コレクションが中心である。また、1950年代に実施された民族学調査や1916年反乱の記憶に関する調査記録も残されている。帝政期からソ連時代初期にかけて活躍したクルグズ人社会活動家ベレク・ソルトノエフ（1878-1938）が執筆した、クルグズの歴史や慣習などをまとめた大部の『赤色クルグズ史(Кызыл кыргыз тарыхы)』（アラビア文字クルグズ語）も残されている。これ以外にも、科学アカデミー付属図書館<sup>(10)</sup>や国立図書館<sup>(11)</sup>には稀覯本や学位論文、ソ連時代初期からの新聞類が収められている。

もちろん過去の痕跡をとどめるのは文字史料だけではない。息抜きも兼ねて国立映画音響写真資料館に足を運んでみるのもよいだろう。ここにはソ連時代を中心として帝政期から現代に至るまでの写真、映画を中心とした視聴覚資料が保管されており、写真は一枚43ソムでプリントしてくれる。

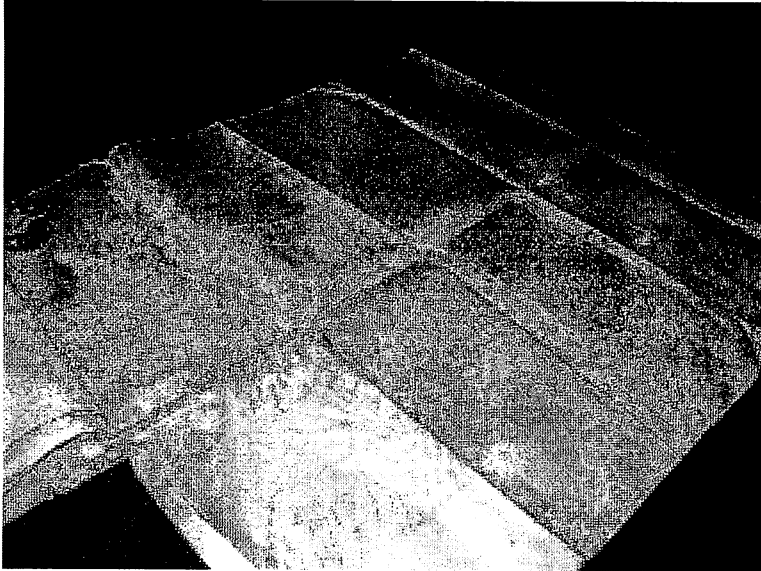
#### おわりに —— クルグズでの文書館作業を終えて ——

「私たちは自らの歴史を知らない」—— 半ば絶望のニュアンスを込めて話すクルグズ人は研究者、市民を問わず少なくない。しかし、今回の調査を終えて「果たしてそうだろうか?」という印象を持たざるを得なかった。史料が無いことは決してない。むしろ一部ではあるが旧弊を強く引き摺る文書館の体制や、研究者を取り巻く状況に問題があるのではないかという印象を強く受けた。事実、今回の滞在期間中、文書館で作業するクルグズ人（特に若手）は皆無に等しかった。

筆者はナルンでの文書館作業の際、近郊の牧村を訪問し、1916年反乱時に中国領へ逃亡した経験を持つ93歳の古老にお話をうかがう機会を得た。怯えきった大人におんぶされて逃げたこと。走って山を超えたこと。中国のトルファンで15歳まで暮らしたこと。父親が中国で死んだこと。帰郷する際に中国人と結婚した姉は中国に留まったこと。英雄の銅像を作り、マナスが触ったといって石を崇め奉るのもけっこうだが、果たして、これまで彼の「声」を聞き取ろうとする者はいたのだろうか? 文書館史料の精査と並行して、歴史の生き証人世代の記憶を書き留めることもこれからの大きな課題になるだろう。筆者は一介の外国人研究者に過ぎないが、この作業に僅かでも寄与できればと願うものである。

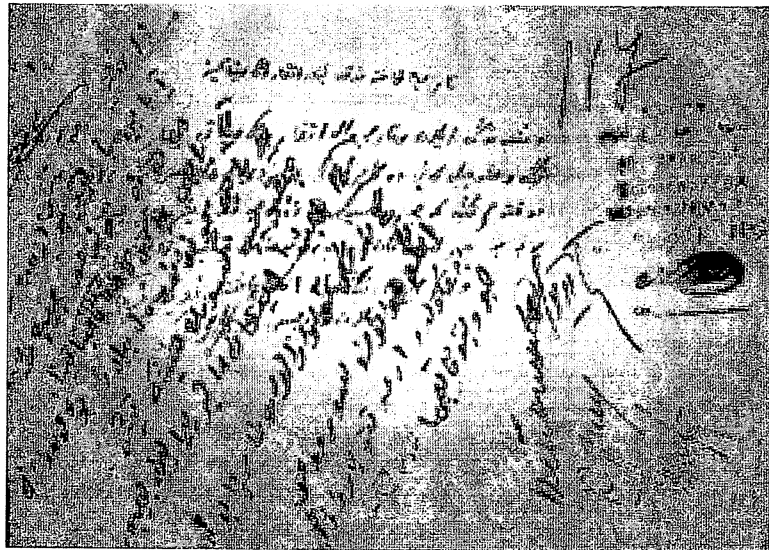
<sup>(10)</sup> г. Бишкек. ул. Чуй 265 а тел: +996 (312) 484073. 利用に際しては特に紹介状などは不要。要顔写真。

<sup>(11)</sup> г. Бишкек. ул. Ю.Абдрахманова 208 тел: +996 (312)662090. 利用に際しては特に紹介状などは不要。要顔写真。



▲ クルグズのある部族の系譜（サンジラ）  
に思わず息を呑みます。（国立中央政治文  
書館所蔵）

▼ もちろん書き込み（決裁）もアラビア  
文字表記です。写真は1927年のナルン州の  
ある郷でのソヴェトの選挙に関する文書。  
「もっと丁寧に書けよ」と突っ込めないの  
は歴史を勉強する人間の悲しい性でしょう  
か…（ナルン州国立中央文書館所蔵）



（北海道大学大学院博士後期課程 / カザフスタン教育科学省付属東洋学研究所）